



田中素香先生 講演風景

## 第十四回 大阪商業大学比較地域研究所講演会

### 田中素香氏

### 「激動するヨーロッパ情勢とEUの将来」

和田聡子

比較地域研究所主催・日本政策金融公庫後援による一般市民・学生向け講演会が本年は6月3日に開催された。

今年「激動するヨーロッパ情勢とEUの将来」というテーマで、その道の研究者として御高名な田中素香先生(東北大学名誉教授、中央大学経済研究所客員研究員)のご講演、続いて田中先生と前田啓一先生(経済学部教授、比較地域研究所所長)との対談の二部構成で行われた。

筆者は大学院時代より田中先生の多くの御著書ならびに日本EU学会でEU経済、欧州統合を学ばせていただいた。ご講演では、EUとアメリカ、ロシア、中国等の諸外国との関係性も含めてダイナミックな視点から示唆に富んだ見解を述べられ、久しぶりに学生時代に戻った気分です。90分超の講演会を大変興味深く拝聴した次第である。

講演内容は、主として①20世紀のEU統合の歴史、②イギリスのEU離脱とポピュリズム台頭の問題、③イギリスのEU離脱への道筋、④EUの現状と統合の将来、であった。なお、ユー

## 市民向け講座を開催

### 平成29年度第6回市民ビジネス講座 東大阪のものづくり長寿企業

―豊かな経験から学ぶもの―

地域市民、地域企業を対象に、社会を大局的に捉えるための講座を昨年に引き続き実施しました。今回は、東大阪地域の長寿企業にフォーカスし、創業年数の長い東大阪のものづくり企業の経営者をお招きして豊かな経験からの学びをテーマとしました。

第1回  
11月30日(木)

―創業100年をふり返る―

濱谷 和也 株式会社電業 代表取締役社長

第2回  
12月7日(木)

伝統製菓業を受け継いで

小西 秀治 小西製菓株式会社専務取締役

第3回

12月13日(水)

事業承継の本質

―経営革新に取り組んで生まれ変わる―

村上 義昭

日本政策金融公庫総合研究所 主席研究員



小西 秀治

濱谷 和也



写真 右上 濱谷和也氏、左 小西秀治氏  
中 村上義昭氏、下 会場風景



◎会場 大阪商業大学 4号館5階  
4510教室

◎時間 午後6時00分〜午後7時30分(90分)

■主催 大阪商業大学比較地域研究所  
■後援 日本政策金融公庫  
■協力 工場を記録する会

平成三〇年二月一〇日印刷発行

編集発行

印刷所

大阪商業大学比較地域研究所  
株式会社ライジングサン

〒五七七-八五〇五 東大阪御厨栄町四-1-10

〒五九九-八三三四 大阪府堺市中区土塔町七九-4

☎〇六(六七八五)六一三九  
☎〇七(三三〇)七五〇三

口危機問題に関しては今回の講演会では時間の都合上、触れられなかったことからこの詳細については田中先生の近著『ユーロ危機とギリシャ反乱』(岩波新書)をぜひお勧めしておきたい。

それでは以下、講演概要を順に紹介していく。

まず、20世紀のEU統合の歴史について大きく4段階に分けて話を進められた。第1段階はフランスと西ドイツ(当時)の不戦体制構築を目的した欧州石炭鉄鋼共同体(ECS)の設立である。この成功を受けて第2段階の欧州経済共同体(EEC)が設立され、関税同盟を活用しながら域内市場を育成する。その結果、設備投資と貿易が飛躍的に伸び、アメリカへのキャッチアップを果たしていく。第3段階はヒト・モノ・カネ・サービスの4要素の自由移動を唱えた「単一市場」の創設である。第4段階はこの単一市場を様々なヘッジファンドや投機筋から防衛し、かつ安定化をはかるために統一通貨「ユーロ」を導入したことであり、まさにユーロは「政治的通貨」と呼ぶことが出来る。これら4段階がいずれも成功し、同時に6カ国から始まった加盟国が15カ国まで拡大したのが20世紀のEUである。21世紀に入り、市場経済に移行した中東欧諸国が次々と加盟したことで、現在、28カ国で人口も5億5000万人の超国家連合体となっている。

つぎに、イギリスのEU離脱問題とポピュリズム台頭へと話が移っていく。2016年6月23日、イギリスでは僅差(反対52%、賛成48%)でEU離脱が決まる。イギリスは独特の国で他のヨーロッパ諸国とは全然違ったバックグラウンドを持っている。つまり19世紀の後半から第1次大戦までは「世界に陽の沈むところがない」と言われた大帝國であった。その後2度の戦争を経て国内経済が停滞する「英国病」も経験し、ついにEECへの加盟も決断する。加盟後はむしろ活発な域内貿易によって経済

ル化と新自由主義の負の遺産として顕在化してきたと捉えておられる。さらにポスト・リーマン危機時代に入って、ポピュリズム自体が民主主義の一面として「置き去りにされた人々」を救済する主張が沸き上がるが、既存の秩序を改善せず崩壊するこ

とで悪化しているとの懸念も示される。

続いてイギリスのEU離脱の道筋についての見解を述べられた。まず、離脱の3類型(ソフト、ハード、超ハード)の一般的なシナリオを説明された上で、イギリスの対EU貿易比率は半分以上を占め、イギリスとEU諸国の企業間におけるサプライチェーンが緊密に絡み合っている状況から今後もEUとの経済関係を抜きにしてイギリス経済は成り立たないと指摘された。よって、イギリスとEUが喧嘩別れすることなく互いに我慢しながら、経済・政治・防衛問題にとどまらずイギリス在住のEU市民ならびにEU在住のイギリス人の人権保障等も含めて交渉を進めていかねばならないとも主張された。

最後に、EUの現状と統合の将来について語られた。EUはリーマンショックによる経済の落ち込みとユーロ危機で追討ちをかけられ2番底を経験した。イギリスとアメリカはいち早く回復した一方、EUは時間がかかり、今ようやく回復軌道に乗り始めている状況である。EUの対外関係として中国、アメリカ、ロシアの脅威は大きく、これら大国にEU各国がバラバラに対応する力を有していないわけであり、ここにEUを解体・崩壊できない理由があると田中先生は指摘される。現に中国の対EU直接投資はリーマンショック頃から急激に増えて昨年は360億ユーロにもほり、EU各国は自国の虎の子を積極的に買取する中国の機動力と実行力に刃が立たない状況にある。さらにアメリカの

パリ協定離脱やロシアのバルト三国・旧東欧諸国に対する軍事的

成長のトレンドも順調で人口もいまだ増加傾向にあり、ドイツや日本のように労働力人口の不足を懸念する必要もない。

それならば、イギリスは何故にEUを離脱するのか? サッチャー政権以来、保守党は概して高学歴層・中産階級以上の支持政党であり、低所得層・労働者階級を擁護する政策を打ち出してこなかった。EU離脱派は労働者層で「置き去りにされた人々(people left behind)」と言われている。そこにきてEU離脱が(唯一無二の)目的で組織された英国独立党(UKIP)が反政府的立場の労働者層の欲求不満を吸い上げる形となる。このUKIPとEU懐疑派の保守党議員が結びついた「奇妙な連合」によってEU離脱が決定したわけだが、イギリスにおける反グローバリズム、ポピュリズムの動きを諸外国と比較しながらさらに詳細に分析を進めていく。田中先生が「投票による革命」と呼ぶイギリスのEU離脱とアメリカのトランプ大統領の勝利に共通するのはアングロサクソンの思考である。両国共に労働者層に支持を訴えかけて選ばれながらも、現実の政策は富裕層優遇のまままで一向に格差問題も改善されない状況に対する労働者層の怒りが今回のポピュリズムの中軸ではないかと指摘される。ここで、フランスに目を向けると2017年5月7日に決選投票の末、親EU派のマクロン氏がポピュリズム政治を断ち切って大統領に就任した。一方、反EU・極右政党のルペン氏を支持したのは労働者層・低所得地域の選挙区であってイギリスと同様の傾向が見られた。ただし決定的に違う点は、フランスの高齢者はネオナチ時代への回帰を警戒すべくルペン氏を支持しなかったのに対し、イギリスの高齢者は大英帝国時代のノスタルジーから反EU・独立意識が強く、離脱を支持した比率が高いことである。田中先生はポピュリズムについて戦後のグローバ

リ化と新自由主義の負の遺産として顕在化してきたと捉えておられる。さらにポスト・リーマン危機時代に入って、ポピュリズム自体が民主主義の一面として「置き去りにされた人々」を救済する主張が沸き上がるが、既存の秩序を改善せず崩壊するこ

とで悪化しているとの懸念も示される。

講演会後、フロアーからは大変多くの質問・意見が寄せられ、対談者の前田先生が講演内容について「EUはなぜこうなってしまうのか?」「今後、どうなるのか?」「EUとイギリスは円満離婚が成立するのか?」「フランスのポピュリズムの騒ぎは何だったのか?」「テロ・難民問題への対応は?」の5つの論点に集約された。これら論点に対して、田中先生のお応えのポイントを筆者なりに3つに整理すると、①「勝ち組」のドイツは「負け組」および反ドイツの立場のEU諸国の状況や国民性を理解した上で効果的な経済支援が重要であること、②イギリスの離脱交渉において製造業と金融業の交渉条件は分けて議論を進めるべきであること、③テロ・難民問題に関しては経済学的には分析が難しいが、難民についてはまず既述の「有志連合」で受け入れるシステムを形成し、時間をかけながらも反難民的立場のEU諸国にも理解を広めて相互依存と団結力を図っていくこと、である。ところで講演会開催から1か月後、日EU経済連携協定(EPA)交渉が大枠合意に至ったことについて少々触れておきたい。

この合意は昨今の反グローバリズムな世界の動きに対し、日本とEUが自由貿易を主導する役割として期待される。世界貿易の3割超を占める日EU経済圏の誕生が、日本とEU双方の今後の経済成長にとって大きなカギと言えるのではないかと

(本学非常勤講師・大阪学院大学経済学部教授)

# 地域の音楽フェスティバルとジャズの親和性

桑島紳二

市民主体の音楽フェスティバルが各地で盛んに行われている。その多くが「ジャズ」をテーマに掲げているのはなぜだろうか。モダンジャズの成り立ちをもとにミュージシャンの視点から考察した。

## 1 各地で盛んな市民主体の音楽フェスティバル

都市部の公共空間や店舗をステージとした市民主体の音楽フェスティバルが盛んだ。例えば昨年27回目を迎えた「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」では仙台市の中心街にある美しい並木道界限に47のステージが設けられ、約5000人のミュージシャン、760のバンドが出演、約70万人もの観客が訪れている。19回目を迎えた「高槻ジャズストリート」では阪急高槻市駅、JR高槻

駅周辺など64のステージに約4000人のミュージシャン、約800のバンドが出演し、10万人規模の観客が訪れている<sup>1</sup>。小規模なものも少なくない。本学近辺でも「小阪ジャズストリート」が行われ、メイン会場として本学の施設が使用されている。

市民主体の音楽フェスティバルとは具体的にどのようなものか。多くのフェスティバルに共通するポイントを2つ挙げる。

### a 市民が主体となった非営利事業である

実演芸術は「演じるひと」とそれを「見るひと」に加えて、イベントの内容を考え、場をしつらえ、演じ手を招き、見るひとを招きいれる役割を担う「支えるひと」がいて成り立つ。興行としてのジャズフェスティバルでは「演じるひと」は

b まちなか回遊型音楽イベントである  
市民主体の音楽フェスティバルでは、まちなかの公園、駅前広場、歩行者空間といった公共空間に加えライブハウスや飲食店など、点在する会場で同時並行的に開催される。これを「まちなか回遊型音楽イベント」と呼ぶ。街のあちこちから流れてくる音楽を頼りにマップ片手に見て歩く、聴き込みたいと思えば腰を落ち着けて聞く、疲ればどこかのカフェで休む。このように勝手気ままに過ごせるのがこのイベントの楽しみ方である。まちなか回遊型音楽イベントは複数の会場それぞれでリレー式にライブを行うことから、多くのミュージシャンを集めなければならぬ。運営サイドとしてはこれがいちばん手間のかかる点である。

筆者の知る限りでは、この形式のイベントは1981年に開催された「神戸ジャズストリート」が初めてである。三宮駅から山側の約1キロにわたる北野坂と呼ばれる通りがある。その通り沿いのライブハウスや、教会、学校施設などがライブ会場となり、さまざまなジャズミュージシャンが出演した。プログラム片手に点在する会場を回り、気に入った演奏を楽しむというスタイルが当時話題となった。

## 2 過半数のフェスティバルはジャズがテーマに

市民主体の音楽フェスティバルにはその名称に「ジャズ」が含まれていることが多い。「市民主

体の地域活性化(音楽イベントを通じたまちおこし)に関する調査研究業務報告書<sup>3</sup>では関西圏の12の音楽フェスティバルをとりあげているが、そのうちイベント名に「ジャズ」が含まれているものは7件、イベント名には含まれていないが実施団体名に「ジャズ」が含まれているものは2件、ジャズと関連づけていないものは3件であり<sup>4</sup>、12件中9件がジャズに関わりのある音楽イベントである。

鑑賞対象としてのジャズは幅広い世代に親しまれている音楽ではない。1930年代ラジオの登場によってジャズはアメリカの大衆に広く受け入れられ、その後世界へ伝播していったが、1960年代、ロックが登場し若者の圧倒的支持を受けジャズはマイナーな音楽になっていく。1970年代にはロックの要素を取り入れたエレクトリックジャズやフュージョンが登場し再び若者の支持を得るがそのブームも去り、今では正統派のジャズが一部のマニアックな人々に支持されるに留まっている。したがってジャズに馴染んだ経験があるのはほぼシニア層である。市民主体の音楽フェスティバルとしてより多くの人々の支持を得る必要があるのであれば、単純な話、ジャズのような音楽よりも、オールジャンル対応のほうがいだろう。にもかかわらず市民主体のまちなか回遊型の音楽フェスティバルに、なぜジャズをテーマに据えるケースが多いのだろうか。

ビッグネームのプロミュージシャンであり、「支えるひと」はプロモーター会社であり、市民は「見るひと」だった。対して市民主体の音楽フェスティバルでは「演じるひと」も「見るひと」も「支えるひと」も市民ボランティアである。もちろんミュージシャンもほとんどがボランティアだ<sup>2</sup>。

1970年代、「ライブ・アンダー・ザ・スカイ」や「オーレックス・ジャズフェスティバル」など、本場アメリカのジャズミュージシャンによる演奏を売り物とした大掛かりなイベントが定期的で開催されていた。しかし、このような興行としてのジャズフェスティバルはバブル経済が崩壊した90年代以降に休止が相次いだ。その一方で市民主体の音楽フェスティバルが各地域で立ち上がっていく。

## 3 即興演奏のための音楽

ジャズは20世紀初頭、アメリカのニューオーリンズで生まれた。1940年前半、リズム、メロディ、ハーモニーという音楽を構成する3要素を革新したビバップが生まれた。以降、クールジャズやハードバップ、モードジャズなどさまざまなスタイルのジャズが次々と生まれていくが、いずれもビバップで開発された演奏様式が土台となっていることから、これらをモダンジャズと呼んでいる。

ビバップが生まれたのはニューヨークのハーレムにあった「ミントンス・プレイハウス」だった。ビバップが誕生する前はビッグバンドが花盛りだった。17名前後で編成されたビッグバ



「定禅寺ストリートジャズフェスティバルin仙台」(2008年9月13日 撮影)

ンドでは強力なビートが求められ、ピアノ、ギター、ドラム、ベースがリズムセクションを担っていた。しかし、いくらリズムの要といえフロントで華やかにソロやハーモニーを奏するホーンセクションに対して、もっぱら淡々とリズムを刻むことを求められるリズムセクションのミュージシャンたちは欲求不満がたまっていった。彼らの不満の解消口が「ミントンズ・ブレイハウス」で毎週月曜の深夜に行われていたジャムセッション(以下、「セッション」と略す)だった。リズムセクションだけでなくホーンセクションのミュージシャンもセッションに加わり、ミュージシャン自身がアドリブを演奏して楽しむためのジャズであるビバップが開発されていった。

ビバップは、誰もが知っているヒットソングの旋律を用いて、原曲のコード進行や音階に忠実であることをルールに、合奏しているミュージシャンと音で対話しながら原曲とは全く異なったメロディを即興で演奏する。鑑賞者はこれにヤジを飛ばしながら参入し、どう転ぶのか分からない一発勝負の演奏をミュージシャンといっしょに楽しむといういささか騒がしい鑑賞法が広まっていった。また、リハーサルに時間をかけず、あえてぶっつけ本番でレコード録音したり、公演そのものがセッションのようなかたちで行われるようになった。

利であり、「演じるひと」も「見るひと」も「支えるひと」もボランティアであることを述べた。さらに「まちなか回遊型音楽イベント」では一定のクオリティーのバンドを多数編成することが必要であることを述べた。

3章では、即興で合奏できるモダンジャズの演奏様式が確立され、一発勝負の演奏をミュージシャンと一体になって楽しむライブ性重視の鑑賞法が広がったことを述べた。

4章ではセッションはジャズミュージシャンにとって、さまざまな意味を持つ必要不可欠な場であり、毎日のようにどこかでセッションが行われ、そこで出会ったジャズミュージシャンたちはSNSを通じてネットワークを形成することを述べた。



「バー蓄音機でのセッション」(2017年10月17日 撮影)

#### 4 情動の共有とSNSから生まれる

##### 「コミュニティ

セッションはモダンジャズのミュージシャンにとって即興演奏に関わる感性、反射神経、技術を磨く場として必要不可欠なことは今も昔も変わらない。ではどのような様子で行われているのか。筆者の実体験をもとに説明する。

関西では大阪市内を中心にいつもどこかでセッションが行われている。セッションに行きたい日は、SNSを通じて毎日送られてくるセッション情報を見て行き先を決める。筆者がしばしば訪れる「バー蓄音機」は近鉄八戸ノ里駅の八戸ノ里商店街にある。この店は20人も入れれば満員のこじんまりしたライブハウスである。セッションデーは月に1回、プロミュージシャンがホスト役を務める。夕方5時、サックス奏者、ギターリスト、ドラマー、ヴォーカリストといったアマチュアミュージシャンたちが、神戸や和歌山、近くは地元からやってくる。参加世代は20代から60代までバラエティーに富んでいる。10人足らずが集ったところでセッションが始まる。セッションで用いられる楽曲は誰もが知っている往年のスタンダードナンバーが多い。テーマとなるメロディを奏でたあとは、テーマと同じコード進行でアドリブをなんども繰り返し、再びテーマのメロディを奏でて曲が終わる。セッションでの演奏はこのような単純な構成がほとんどであるから、打ち合わせもリハーサルもな

モダンジャズは基本的に、メンバーを固定し入念にリハーサルを行うことで完成度を上げていくことよりも、異質な他者であるミュージシャン同士がぶっつけ本番で対話することに価値を置く音楽である。それは見方を変えれば、知らないミュージシャンが即席でバンドを編成してもリハーサルなしで演奏可能ということである。この変幻自在な柔軟性とセッションを通じて築かれた広範なネットワーク網。ミュージシャンと鑑賞者が一体となって楽しめる音楽であること。そして、若年層の新規参入者がアマチュアのジャズミュージシャン人口を維持していること。これらが、一定のクオリティーを持つボランティアのバンドを多数編成することが開催に不可欠な「まちなか回遊型音楽イベント」の開催者ニーズに合致するのである。その結果、ジャズをテーマとした市民主体の音楽フェスティバルが多いのである。

供給サイドから見れば、音楽イベントのテーマをジャズとすること<sup>6</sup>で、人件費に費用を割くことなく大量のミュージシャンを獲得することができ、「まちなか回遊鑑賞型」のような形態による市民主体の音楽フェスティバルが可能になった。また需要サイドから見れば、豊富な余暇時間を持ちジャズに親しみのあるシニア層が鑑賞者としてそれを支えた。しかし今後、鑑賞者の世代交代が進んでいくことで、今保たれている需給のバランスは変化していく。

く演奏ができる。ただし、アドリブで自在な表現をおこなうためには、豊富なフレーズを即奏でることができるようストックしておく必要がある。日々の地道な個人練習が欠かせない。

1曲の演奏は10分ほどで終わり、次から次へといろいろな曲を演奏する。単調な演奏になることもあれば、ミュージシャン同士が煽り煽られジェットコースターに乗っているかのようなスリリングな展開になることもある。

終了後、お互いのプレイをたたえSNSで繋がりが解散する。

セッションという場における一期一会の共演。それによって情動が共有されてSNSで繋がりが、プロもアマも関係なく世代や性別を超えた広くゆるやかな開放的なコミュニティが形成される。

ジャズ愛聴者は減少する一方だが、コミュニティを構成するジャズミュージシャンは減ることはない。日本は世界有数の吹奏楽大国であり現役の吹奏楽人口は100万人と言われている。吹奏楽やバンド活動を通じてジャズの即興演奏に魅せられジャズを志向する若年層は決して多いとは言えないが途切れることはない<sup>5</sup>。そういった新規参入者がコミュニティを活性化させている。

#### 5 まちなか回遊型音楽イベントとジャズ

1章で市民主体の音楽フェスティバルは非営

市民が主体となった音楽イベントはどのような方向に向かうのか、それについては今後の研究課題としたい。(本学総合経営学部教授)

- 1 「第26回 定禅寺ストリートジャズフェスティバル in 仙台 報告書」公益社団法人 定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会(2016)2ページ
  - 2 「大阪夕刊」もつと関西 高槻ジャズ祭20年へ『日本経済新聞』(2017/7/3)29ページ
  - 3 ミュージシャンはゲストとしてビッグネームのミュージシャンや一部地域で活躍するプロを招聘するが、多くは地域のプロと多くのアマチュアミュージシャンで占められる。
  - 4 「市民主体の地域活性化(音楽イベント)を通じたまちなかおこし」に関する調査研究業務報告書『財団法人堺年政策研究所』(2011)
  - 5 イベント名に「ジャズ」が記されているイベント(高槻ジャズストリート、守口・門真ジャズフェスティバル、枚方宿ジャズストリート、吹田ジャズ・ゴスペルライブ、和泉の国ジャズストリート、びわこJAZZフェスティバル、大津ジャズフェスティバル、定禅寺ストリートジャズフェスティバル)実施団体名に「ジャズ」が記されているイベント(香里園ミュージックアートビクニック)
  - 6 例えば、日本学校ジャズ教育協会関西本部には、中学から大学まで57校が加盟し、毎年、ジャパンステューデントジャズフェスティバルを開催するなど、盛んに活動している。  
<http://jaje-kansai.net/>
- 7 ジャズを名称に組み込んだフェスティバルであっても、その内容はジャズにとどまらない場合がほとんどである。

## 東井義雄記念館を訪ねて

長妻三佐雄

兵庫県豊岡市但東町にある東井義雄記念館に二度ほど資料収集に出かけたことがある。京都から山陰線で豊岡までいき、そこからバスで出石に、出石でバスを乗り換えて出合というバス停で降りる。出合から進行方向に少し歩くと、豊岡市役所の但東庁舎が見えてくる。東井義雄記念館は、この但東町舎に併設されている。出石には何度か訪ねたことがあった。大学院生の頃、友人と一緒に城崎温泉に旅行した帰りに出石に立ち寄った。明治日本の思想や哲学を勉強する者にとって、出石は加藤弘之の所縁の地としても有名である。加藤の生家も残っており、豊岡市の指定文化財になっている。友人とともに辰鼓楼の大時計や沢庵寺などの名所を見学したあと、何軒か出石そばの店を食べ歩いたのを思い出した。その頃は、まだ東井義雄先生（以下、敬称略）の名前も知らず、出石からバスを乗り換えて、東井の生家である東光寺を訪ねることも思い浮かばなかった。学生時代に読んだ本のなかに東井の名は登場していたはずなのだが、覚えてはいなかった。東井義雄記念館が竣工したのは平成六年のことであり、この記念館がなければ、東井の名前を知ったとしても、但東町まで足を運ぼうとは思わなかったかもしれない。記念館で東井の生涯や考え方の一端にふれたことで、さらに多くの東井の著作を読みたいと思いい、東井を論

くはない。当時は、とくに東井義雄の研究をしていたわけではなく、別のテーマで勉強をしているときに、偶然に東井の名前を知った。その後、代表作である『村を育てる学力』（明治図書、昭和三十二年）を読み、地域社会で子どもたちが本当の学力をつけるためには、「教師」・「保護者」・「生徒」が協力し合うことが必要であることを感じた。東井は、学校現場で教育に携わる教師として、教師と保護者と生徒のあいだを結びつけるだけではなく、教師と教師、保護者と保護者、生徒と生徒のあいだにも交流を生み出す「場」を作ろうと苦心した。地域と学校がともに協力して、地域社会を支える学力を持った子どもたちを育てようとしたのである。東井が学力の根底に国土と郷土を愛する心を置いていたことも忘れてはならないだろう。

本学の教職課程紀要のなかで、東井『授業の方法』の紹介をしたときにも記したことが、東井が地域の子どもの生活を見据え、「教科の論理」だけで押し通すことはせずに「生活の論理」を尊重したことも東井教育の魅力である。どの教科のなかでも達成すべき全国共通の課題があり、それを教育するためには有効だと考えられている一般的な方法がある。東井は教育者として誠実であり、教育法についての研鑽を怠ることはなかった。だが、東井はこれらの方法を学び、積極的に取り入れながらも、目の前にいる子どもたち一人ひとりに向き合うことを大切に。「生活の論理」を踏まえ「教科の論理」では子ど



『土生が丘』と『培其根』（復刻版）

じた研究論文にも注意を払うようになった。東井は自分の弱さと誠実に向き合いながら、日本の将来を思い、故郷を支える人物を育てるために尽力した。東井の著作を読むごとに、その教育に対する真摯な取り組みから多くを学んだ。もちろん、現在も学んでいる最中である。

東井は明治四十五年に現在の但東町で生まれた。志を高く持ちながらも、経済的な理由で父から中学進学の手許がもらえなかった。苦境のなか、東井は勉強を続け、進学の夢を捨てずに姫路師範学校で学ぶ道を選ぶ。『東井義雄の生涯「いのちの教育」を求めつづけた』（東井義雄遺徳顕彰会、平成六年）によれば、十六歳のときに「独来独去無一従者」の言葉に出会ったという。昭和十二年に教え子の質問により、「口蓋垂」の役割に気づき、「生きていくつもりが生かされていること」を発見する。東井は、さまざまな経験を通して、生かされていることに感謝し、いのちを尊重する教育に目覚めるようになる。時代状況がどれだけ変化しようとも、「いのちの教育」の希求は変わらなかった。

最初に記念館を訪ねたのは平成二十五年のことであり、出石に宿泊して二日にわたり資料調査をした。東井義雄記念館のある出合は、出石からバスで二十分くらいだが、バスの本数は多もたちの「生きる力」として学力が定着することは少ない。地域の子どものための「生活の論理」を考慮しながら、「教科の論理」と「生活の論理」を媒介しようと苦心する。また、地域の「生活」を活かす教育を模索するが、自分が最善だと思っていた教育法も、現実の子どもたちと向き合うなかで、うまくいかないことがある。常に見直して考える。

『村を育てる学力』を読み、「生活」や「地域」の思想や論理について考えていると、東井の足跡や蔵書を知りたくなった。たまたま東井義雄記念館の存在を知り、もう少し詳しく東井の教育思想や哲学について調べてみたいと思いい、訪ねることにした。事前に電話で連絡をすると、雪が積もっているのに靴に注意してくださいとのことであった。ハイキング用の靴を履くなど、簡単ではあるが雪対策をして記念館を訪ねた。「出合」のバス停から進行方向に少し歩くと、右手に但東町舎が見えてきて、その横に併設されている記念館はすぐに見つけることができた。庁舎の図書室の方に訪問した理由を話すと、当時の衣川清喜館長に連絡をし

てくださり、一日目は衣川館長に展示を解説していただいた。東井義雄記念館のホームページを見ると、展示が「少年期〜青年期」「ピリツ子の話」「いのちの教育」「苦悩の時代」「花開く時代」「私の声を聞く」「書簡、遺品等」に分類されているのがわかる。東井の年譜にしたがって展示されている品々を館長が一つずつ丁寧に解説してくださった。『村を育てる学力』を

始め、何冊か東井の著書を読み、東井の教育思想や哲学には関心を持っていた。東井の年譜を参考にしながら、その著作を追ってゆくと、時代状況が移り変わるなかで、子どもたちに向き合いながら東井自身が苦悩している姿が浮かびあがる。高度成長をはじめ地域社会も大きく変貌するなかで子どもたちの生活も変わってゆく。東井は作文教育を通して表現される子どもたちの「実感」の変化に大きな影響を受ける。「実感」という容易に表現することのできない、しかも実体化することのできないもの。この「実感」をどのように定義づけ、東井の教育思想のなかで捉えていくかが重要な課題であろう。だが、どれだけ時代状況が変化しても、変わらなかったのは東井が目の前の子どもたちと真剣に向き合っていたことであり、一人ひとりの生命を大切に思っていたことである。子どもたち一人ひとりと向き合うからこそ、一般化しえない「実感」の問題が登場する。子どもたちの「実感」に共感するために、状況に埋没してしまうこともあるかもしれないが、それが教育者としての東井の魅力でもある。「生活の論理」と「教科の論理」を媒介すること、「実感」と向き合いながら普遍的な価値を志向すること、地域での教育に携わるなかで東井が紡いだ文章を読むうちに、その難しさを改めて考えた。

東井の教え子でもある衣川館長から東井の思い出やエピソード

せるエピソードをいくつもお話してくださいました。東井の書籍を読んでもわからなかったことなど、質問をすると丁寧に教えてくださいました。後日、東井の日記についての質問にも電話でご教示くださいました。東井義雄の遺徳を偲び、その教育論に学ぶ「白もくれんの会」(「東井会」)の存在も教えていただいた。「人づくり」「地域づくり」についても学ぶ研究会である。所蔵物や資料を調べ、閉館の時刻に合わせて宿の方に東井義雄記念館まで迎えに来ていただいた。

二日目は東光寺を訪ねた。東井義雄の生家であり、先代のあとを継ぎ、東井が住職を勤めたお寺でもある。宿の方に東光寺まで車で送っていただいた。少し早く出かけたので、東光寺周辺を散策した。道路脇には雪が残っていた。小高い場所に寺があり、足元に注意しながら坂道を登った。お寺の鐘が強く印象に残っている。東光寺では、坊守の東井浴子先生が温かく出迎えてくださり、本堂でご挨拶をしてから、東井義雄先生の書斎でお話を聞かせていただいた。東井についての貴重な本や冊子をおくださったが、今でも大切に勉強させていただいている。書斎にも多くの蔵書が残っており、東井が教師として、住職として勤めながら、いかに勉強家であったかを知ることができた。その後、東井が奉職していた相田小学校跡を案内していただいた。校舎はもう残ってはいなかったが、写真のような石碑が残っ



東光寺の鐘



相田小学校跡

ドを聞いているうちに、その人間的な魅力に私も惹かれるようになった。一日目は閉館後に出石に戻り、夕食の場所を探したが遅い時間だったので、適当な店が見つからずにホテルに帰った。二日目も早めに起きてバスに乗り、再び記念館に行き、資料調査をした。東井の蔵書を見せていただいたが、なかでも、教育関係の多くの書籍、日本浪曼派や民俗学関係の書籍が印象に残った。記念館で『村を育てる学力』のもとになった学校通信『玉生が丘』を読み、十年以上もこれだけの通信を編集して、教師と生徒、そして保護者のあいだを架橋して、豊かな心のつながりの「場」を作り上げた東井の営みに感動を覚えた。「本物は続く。続けるから本物になる」、これは東井の言葉である。記念館で販売されていた『玉生が丘』をわけていただき、今でも、折にふれて読み返すようにしている。帰りには衣川館長が記念館の出口まで見送ってください、心まで充実した資料調査を終えたことを記憶している。

二回目に記念館を訪ねたのは一昨年の初め頃である。事前にも調査のことを記念館に伝え、東井が住職を務めていた東光寺にも訪問したいとお話すると、大変親切に対応してくださいました。但東町内に宿があることも教えてください、二日にわたり、記念館と東光寺、それに相田小学校跡を訪ねることができた。一日目は、西垣勝美館長が応対してください、東井の人柄を偲

ている。東井の『村を育てる学力』の内容を思い出しながら、ゆつくりと小学校跡を見学した。学校通信『玉生が丘』の舞台でもある。帰りに出石そばのお店まで連れて行ってくださった。店主の方から但東町の自然環境と農作物のことなどお話を聞くことができた。東井の著書を読むとき、なかなか「村」のイメージをつかむことができないでいる。しかし、現地を訪ね、いろいろな方のお話をうかがうことで『村を育てる学力』の舞台を少しでもイメージすることができればと思っている。

今まで二回東井義雄記念館を中心に但東町で資料調査を行なったが、ともに充実したものとなった。東井先生に関心をもつようになり、記念館を訪ねたことで人々のお出会いに恵まれたことを感謝している。

体系的な哲学や思想を構築することが難しい現代では、地域に根ざして具体的な人々の「生活」や「実感」に向き合い、「村を育てる学力」を養おうとする東井の生き方から学ぶことは多い。「村を育てる学力」を養うために試行錯誤するのだが、容易に解決策は見つからず、新たな問題が常に登場する。東井は生涯にわたって勉強家であり、子どもたちを育てるとともに、郷土に暮らす人々のつながりを大切にして、地域社会の発展に貢献した。このように地域のために尽力した人物との偶然の出会いも研究の楽しみである。

(本学総合経営学部教授)

◆文部科学省「機能強化支援」の継続助成

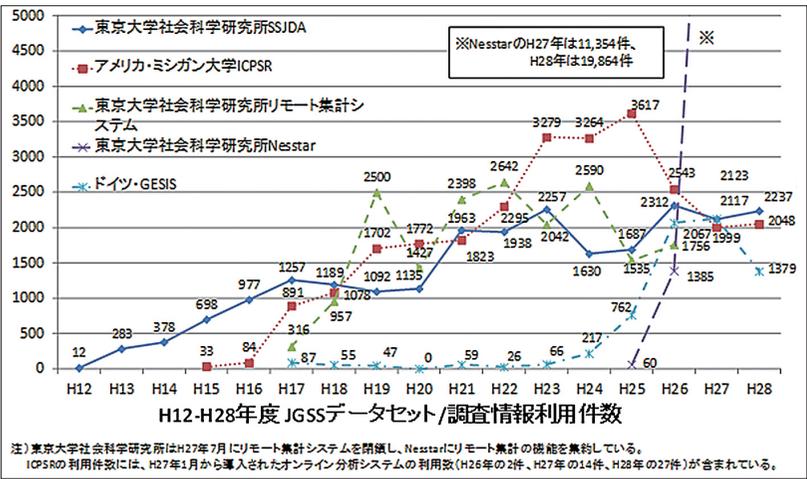
JGSS研究センターでは、日本版総合的  
社会調査共同研究拠点として、日本人の意識  
や行動の現状と変化を明らかにするために、  
2000年から全国調査を実施している。

2016年4月に文部科学省より「特色ある共  
同研究拠点の整備の推進事業 機能強化支援」の  
助成を得た。今年度も継続して採択された。こ  
れにより、JGSS-2017G(後述するEA  
SS 2018を組込む調査)が可能になった。さ  
らに、科学研究費基盤A(東アジアにおける家族の  
変容と社会の持続可能性に関する総合的研究・研究  
代表 岩井紀子)が採択され、JGSS・2018  
(EASS 2016家族モジュールを組込む調査の  
実施が決まった)。

人文・社会学系の共同研究拠点は、全国に国  
立大学10拠点、公私立大学12拠点が認定されて  
いる。昨年または今年度に評価を受けた公私立  
12拠点のうち、S評価を受けたのはJGSS研  
究センターを含む3拠点である。

◆EASS 2017研究発表会と全体会議

2017年6月には2日間にわたり、大阪商  
業大学において東アジア社会調査(East Asian  
Social Surveys)の共同実施機関である韓国のK  
GSS(成均館大学Survey Research Center)、  
中国のCGSS(中国人民大学National Survey  
Research Center)、台湾のTSCS(中央研究院



注)東京大学社会科学研究所はH27年7月にリモート集計システムを閉鎖し、Nesstarにリモート集計の機能を集約している。  
ICPSRの利用件数には、H27年1月から導入されたオンライン分析システムの利用数(H26年の2件、H27年の14件、H28年の27件)が含まれている。

込んだJ17Gを留置調査法で実施した。

一方、2018年2月には、E06の東アジア  
の家族の10年後をとらえるE16家族モジュール  
を組込んだJ18の実施を予定している。全国20  
〜89歳男女4千人(267地点が対象である。J  
17とJ18は、実施時期が一年ずれるが、調査票  
はほぼ同一で、2つのデータを統合して分析で



社会学研究所  
のメンバーを  
迎えて、EAS  
S研究発表  
会と会議を  
開催した。初  
日は、各チ  
ムによる調査  
実施状況が  
報告され、  
2008年に  
実施した文化  
とグローバリ  
ゼーション・  
モジュールの  
10年後をと

らえるEASS 2018の設問について議論し  
た。2日目は、一般参加者を加えた研究発表会と  
E18に関する議論を引き続き行い、モジュール  
の設問を確定した。

◆国内外での研究発表と研究成果の新聞掲載

EASSの4チームは、9月に台北市の中央  
研究院で開催された国際社会学会社会科学方法  
論研究委員会(RC33で共同セッション「東アジ  
ア社会調査の調査方法」をもち、10月にはワシ  
ントンDC Pew Research Centerが主催した  
「東アジアにおける調査研究」と宗教研究」に招聘

できる見込みで  
ある。

J17とJ18  
では、東アジ  
アの比較分析  
とは別に、以  
下の研究課題  
を追求する。

- ①同性の結婚  
に対する意  
識、②J00か  
らJ18までの

累積データを基に、子どもの格差、母子世帯、  
父子世帯、高齢世帯の困窮の諸相、③ベットの  
保有・存在意義・共に過ごす時間、④社会の持  
続可能性に関わる人々の意識行動―自然災害の  
リスク認知・地域の対応力・再生可能エネルギー  
の利用・原発政策―を尋ねている。



ICPSR's 50 Most Popular Search Terms ©ICPSR  
<https://www.icpsr.umich.edu/icpsrweb/content/ICPSR/wordcloud.html>

◆JGSSデータの利用状況

JGSS公開データの一般利用は着実に伸び  
ている。日本・アメリカ・ドイツのデータア  
イティブを通じた公開データの一般利用数は、H  
28年度は2万4千件を超えた。社会科学分野の  
世界最大のデータアーカイブであるICPSR  
(ミシガン大学)のウェブサイトで、「JGSS」  
はデータ検索の際のワードの上位13番目に位置  
している。

された。中国・韓国・日本は、それぞれの社会  
における信仰と宗教的な行動をどのようにとら  
えているかを報告した。

JGSSチームは、11月初めには、日本社会  
学会の大会において、調査対象者の住居が戸建  
て、集合住宅、オートロックマンションである  
ことによる接触可能率と調査協力率について報  
告を行った。さらに11月末には、メキシコ国立  
自治大学において、大学と国際社会学会家族研  
究委員会(RC06)が共催した「地球規模の視点か  
らアジアとアフリカの家族を検討する」全体会  
議でパネリストを務め、研究大会において報告  
した。

9月17日には、J17の「組織への信頼感に関す  
る調査結果」が朝日新聞の「日曜に想う 無関心  
と呼ばれる政治不信」に掲載された。

◆JGSS-2016/17のデータ作成

JGSS研究センターでは、2016年に実  
施したJ16(968回収)の自由記述のレコード、  
2017年初頭に実施したJ17(744回収)の欠  
票分析・自由記述のレコード・データクリニ  
ングを進めている。

◆JGSS-2017Gと2018の実施

2017年11月には、全国20〜89歳男女  
1500人(101地点を対象に、前述したE18  
文化とグローバリゼーション・モジュールを組

◆JGSS最新報告書

「日本版総合的社會調査基礎集計表・コード  
ブックJGSS2016」  
『日本版総合的社會調査研究論文集「17」』  
いずれもセンターのウェブから公開している。

◆JGSS研究員の紹介



孟 哲男(もう てつお)

中国吉林省出身。2017年4月より主任研究  
員として勤務。桃山学院大学院経済学研究  
科博士後期課程修了。専門は現代中国経済の研  
究。JGSS研究センターでは、CGSS(中  
国総合社会調査)データを利用した中国の労働  
供給に関する実証分析に取り組んでいる。趣味  
はサッカー観戦。



吉野 智美(よしの ともみ)

静岡県出身。2017年4月よりPD研究員と  
して勤務。アルバータ大学Human Ecology学  
科博士課程修了。専門は老年社会学。JGSS研  
究センターでは、データの作成とクリーニング  
について学んでいる。趣味は旅行。

今日の企業経営には情報技術が必須である。そうした情報技術環境の下で、いかに事業をイノベーションしていくかを、中小企業経営の視点で検討したのが本書である。『企業の情報行動』同友館（一九九三年）以来、筆者の五冊目の単著で、情報を主題材にした二冊目になる。この四半世紀間の情報技術の発展とその普及は目まぐるしく、まさに隔世の感がある。

初めての単著はNEC製パソコンPC98を使用して執筆した。5インチのフロッピーディスクを職場と自宅の間を毎日持ち歩く。当時インターネットは登場していたものの一般には普及せず、メールはパソコン通信であった。一九九五年になるとWindows95が登場し、以降インターネットが急速に身近になり、その後の情報技術は加速しながら発展し、数年でパソコンの買い替えに追われ、絶えず数台を使用することになる。そしてタブレット、スマートフォンと、情報機器なしでは私の研究生活はない。原稿が書けないと、気分転換にコンピュータを買い替えもした。

コンピュータやインターネットなどの情報技術が社会や経済活動を変容させている。物理的なイノベーションよりも情報技術のイノベーション速づくり産業、情報産業の状況に危機感を持つ。このようなわが国企業の再生の願いを本書に込めた。本書は次のような構成で中小企業のイノベーションについて検討した。顧客価値提供のものづくりパラダイムへの転換、収益に直接結びつく領域での情報技術活用、製品アーキテクチャの変化に応じたものづくり、ネットワーク活用目的の変容と自律分散な産業構造での企業行動、インターネットによる情報作用の可能性、顧客価値基準による事業イノベーション、そして技術偏重とは異なった事業の仕組みという視点からのイノベーションなどである。

筆者の専門領域は中小企業経営である。中小企業のもので現場では情報機器の活用は早く、一九七〇年代にはNC旋盤などの工作機械が導入された。ただ事務処理や業務管理など、いわゆる情報システム活用領域では、業務量が少ないために効果は発揮できなかった。しかし今、情報技術は多様な活用が可能になっている。情報技術の新たな活用が中小企業の課題である。

情報技術を活用して効果的な、そして効率的な事業を構築するだけが中小企業の課題ではない。情報技術を活用して情報を創造し、情報を顧客価値に結びつけることが収益を生む。それはコスト削減活動とは異なった次元である。

物理的なものを扱うとき、そこには必ず規模の経済性が発生する。この経済性があるため企業規

度が凄まじく、またそれは多様な可能性をもたらしながら社会生活や企業活動を変容させ、物理的なイノベーションさえも先導する。製品もハードなものよりソフトが重要性を高め、なかには製品同士がつながって自律的に作動を制御するシステム化したIoTそしてAIと、情報技術を活用した製品が次々と登場する。今はまだ情報革命前夜

## 大阪商業大学比較地域研究所叢書第16巻 情報技術と中小企業のイノベーション

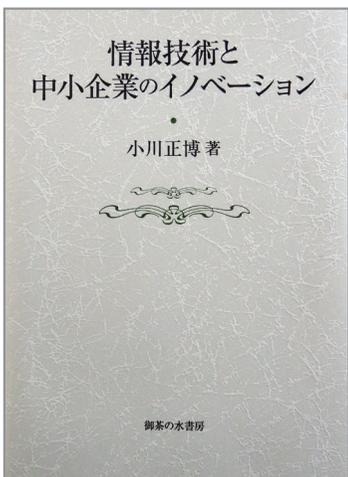
（御茶の水書房、二〇一七年）

小川正博

なのかもれない。

そうしたためまぐるしく進化を続ける情報技術を活用することで企業活動を、事業をイノベーションすることが企業の課題である。情報技術を制する者が世界でプレゼンスを発揮する時代である。

アマゾンやグーグル、フェイスブックなどさまざまな情報企業が登場し世界を席巻する。こうしたアメリカのベンチャー企業や新興国企業が情報模が競争優位の要因になり、中小企業よりも大量生産する大企業のほうが、同じ製品を作れば製造コストが低く有利になる。しかし情報の世界では、情報のもたらす意味を価値化し、他の企業が保有や創造できない情報を創造し、活用できることのほうが経済的価値を発揮する。小さな企業でも他にはない貴重な情報を創出することができる。一方で企業規模の大きな企業が有効な情報を保有



し、その効果を発揮できるとは必ずしもいえない。

他にはない貴重な情報として模倣しにくい、経済的価値のある情報を創造し、活用すれば、小さな企業でも自律的な経営ができる。情報技術や情報の効果的な活用はイノベーションそのものである。

だからこそ多様な可能性を秘める情報技術を活用すれば、そのイノベーションによって中小企業は

産業だけでなく、ものづくり分野でも活力を発揮し、多様な事業を創造し、驚くような事業の仕組みも創りはじめている。そこでは苛烈な競争を勝ち抜くためのイノベーションが繰り広げられ、産業を活性化する。

また情報技術を活用する新興国企業が急速に成長している。情報技術を活用すれば技術力が未熟でも、容易にもものづくりに参入できる。資金さえ調達できれば、情報技術によるものづくりノウハウは生産設備企業から入手できる。そして旺盛な企業家精神で足元の大きな市場を開拓する。先進国のもものづくりは短期間にキャッチアップされるようになった。

しかし残念ながら、情報技術を活用する企業で、ネットビジネス企業で、世界で存在感を示す日本企業が登場しない。デジタル技術が登場して以来、一時期は半導体産業が存在感を示したものの、その後は凋落し見る影もない。国内市場に留まったパソコン産業は衰退し、スマートフォンははじめから国内市場でも影が薄い。

にもかかわらず相も変わらず技術立国や高度なものづくり技術、高品質な日本製品を標榜し、それを多くの人々が疑いもなく信じている。一時期はあったかもしれないそんな日本の技術力の相対的低下、そして今やあらゆる技術をリードする情報技術活用の遅れ、ハードなものづくりからソフトなものづくりへの遅れ等々、筆者はわが国もの

再生できる。貴重な情報を収集・創出しそれを価値化することが収益を生む時代であり、収穫増進さえ可能である。それが中小企業でも個人でも、情報技術の進展によって可能な時代になっている。

新興国企業が躍進しグローバルなものづくりに移行した今日、中小企業は専門性を高めて、他に誇れる何かを形成することの重要性が増している。狭い領域であっても高い専門性を持つ企業は世界にアピールできる。特異な存在をインターネットで世界に発信すれば、それを求める顧客に出会える機会が増える。

情報技術は多様な可能性をもたらすものであり、それを活かす経営は、中小企業に新しい時代をもたらす。中小企業が再生するためには、進展する情報技術の活用こそが有効だというのが著者の視点である。

現代はまさに情報の時代であり、ものよりも情報の価値がますます高まっている。物理的な価値よりも、ものが内包する、あるいはものが発揮する情報の価値が高まっており、そのことが企業にイノベーションを迫っている。情報の価値を増殖する企業経営に向けて、新しい仕組みを構築し、事業そのものをイノベーションしたい。このような思いが中小企業に伝われば幸いである。

（本学総合経営学部教授）